

「リスペクタブル」な場所

—清く正しく美しく—

森 未 貴*

「うちの近所にも若い奥様がおられまして、2つになる女の児がおありになるのですが、(略)女中もいないのに実によくその辺が片付いていまして、(略)とにかくその方はいつも洋服なのですが、その日は、部屋の中に乳母車を置いて、それへ赤ちゃんを這い出さないように巧いこと入れておられまして、(略)さあどうぞお茶を一つ、云いながら、椅子に掛けたと思ったら、とたんにこう、腕時計を見て、あ、これからショパンが始まりますわ、奥さんもお聴きになりませんか？云われて、ラジオのスイッチを開けて、一方では音楽を聴きながら、一方ではその間も手を休めずに、牛乳を匙で掬っては赤ちゃんに飲ましておられますの。そんな具合に始終時間を無駄にせんように段取りをつけて、(略)3つを一遍に済ますなんて、実に頭のよく働く機敏なやり方だと思ひまして…」

「赤ちゃんの育て方なんかも現代式はすっかりちがっておりますのね。」

「その奥様も云うておられましたわ、(略)折角抱かないような習慣をつけてありますのに、年寄が来ると無闇に抱くものでございますから、そのあと暫く、抱いてやらないと泣くようになりまして、又もとの習慣をつける迄に骨が折れて困ります云われて」

「そう云えばこの頃の赤ちゃんは昔のように泣かなくなりましたわ。(略)」¹⁾

ここに見られるような洋服のくらし、椅子式生活、科学的育児、「能率のよい」時間の使い方、この新しいふるまいを支える価値観をリスペクタビリティ (respectability) と呼ぶことができるだろう。リスペクタビリティとは、「礼になかった正しい作法と道徳をさす用語」である。慎み、節制、純潔、儉約、献

*1992年3月神戸女学院大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了、現在、甲南女子中学・高等学校社会科非常勤講師

身、…「情熱」を自己抑制できることからくる、「きちんとした」振る舞いは、中産階級の規範として成立し、やがてナショナリズムと結びついて、19世紀西欧の社会全体に広まっていった²⁾。近代日本でも、「勤勉、自助、清潔、健全なる家庭」というリスペクタビリティの理想に基づいた新しい生活様式が模範とされ、大正期に登場する新しい階層が積極的に身につけていく。その時、都市は不潔で不健全な「リスペクタブルではない場」として否定的に語られ、対比として清潔で健全な「郊外」が賞揚されていく。本稿は「煙の都」大阪と「健康地」として開けてゆく「阪神間」という地域を中心に、育児をめぐるリスペクタビリティについて考えてみようとするものである。なお、本文中の統計については、『新修大阪市史』『明治大正大阪市史』『武庫郡誌』『新・旧芦屋市史』『市政要覧芦屋』『日本長期統計総覧』によった。引用文は新かな使いに改めている。

1 健康地としての「阪神間」

上記『細雪』は、昭和10年代初めの芦屋を舞台にした小説である。芦屋は、兵庫県南東部、大阪と神戸の間に位置し、現在の神戸市灘区／東灘区／西宮市／宝塚市などとあわせて「阪神間」と呼ばれる地域の一つである。

明治以前は「適当な入江もなく、砂礫あるいは粘土質の悪地からできていた上に水災が絶えなかった」ため農業や漁業もふるわず、酒の生産で知られる西宮や灘と大きく異なり「いわば阪神間でも最も生産力の乏しい無名の集落に近かった」³⁾という、この地が注目されたのは明治期後半、「健康地」としてであった。

当時、「健康」は、衛生という身体技法が浸透する中で注目され、盛んに用いられた用語であった。度重なるコレラの流行を契機として、明治に入ると伝統的な「養生」が国家的な「衛生」に切り替えられ、住宅や上下水道などのインフラストラクチャーの整備と共に、民衆への医学的知識の普及が図られていく。講演会・博覧会などを通して、「科学的」な認識によってそれまでの経験

知を「迷信」として退け、「外部からの」菌の侵入を防ぐことが啓蒙されていき、清潔／不潔という二分法によって自己を点検するまなざしが内面化されていく。が、感染の危険と恐怖が強調された結果、「不潔」に対する過度なまでの注意と排除によって「清潔」の価値が浮かび上がるという反転が起こる。こうして「危険な場所」の発見＝創出による都市問題が出現する一方で、感染・汚染という危険から逃れ、病気に負けない強い身体を作ろうとする「健康」がブームになっていく。

工業化の進展と共に著しく環境が悪化した大阪では、「健康」は特に重要な関心事であった。紡績業を中心に工業が発展した大阪は、日清戦争・日露戦争を通じて植民地を含む市場の広がりの中で「東洋のマンチェスター」と呼ばれるようになる。第1次世界大戦を経て重化学工業もさらに進展し、1932年（昭和7年）まで工業生産額は全国一を記録した。が、それによって大気汚染が進み「煙の都」と呼ばれるほどになっていく。1902年（明治35年）には既に、大阪府会が「煤煙防止に関する意見書」を府知事に提出していたが、1925年（大正14年）の市立衛生試験所の調査では、4平方尺（約0.37m²）につき1年で71.65gの煤塵を記録したという。1927年（昭和2年）には、大阪都市協会の煤煙防止調査委員会を発足させ、その運動によって1932年（昭和7年）に煤煙防止規則（大阪府令）が公布されるがあまり効果はない。

また、工業化に伴い、急激に増加した人口も問題となっていった。1889年（明治22年）に47万2,247人だった大阪の人口は、1925年（大正14年）には、前年の関東大震災と、この年行われた第2次市域拡張により、211万4,804人を数え、全国最大の都市となる。1930年（昭和5年）には245万3,573人となった。そこで住宅問題も深刻化し、人口密度と共に死亡率も高い状態から、過密で「不衛生」な都市環境への対応が迫られることになる。その環境の改善策には、生活の規律化という課題が重ねられた。都市や住宅を清潔に作り変えていくことと、衛生的・科学的・能率的な生活のしかたを啓蒙することがめざされる。それらは労務管理の点からも要請される課題であった。都市計画と社会事業が行

政によって推進され、合理的な生活へ改良することをめざす生活改善運動が展開される。このように「都市」が改善すべき存在として現われる一方、清潔で健全な「健康地」に対する需要が高まっていく。交通網の整備や「軒切り」と称する道路整理事業や路幅拡張事業による立ち退きなどによって、大阪の周辺地域の人口は増大し、宅地開発も帝塚山（大阪市住吉区）や浜寺（大阪府堺市）など大阪の南部だけでなく全方位的に広がっていった。その中で「阪神間」は、海と山が近く、気候が温暖で湿度も低くまさに「風光明媚」な土地故に注目されていく。それは、自己規律化による「健康」が新しい規範として浸透していく中で見い出された価値なのであった。

阪神間の宅地開発は、企業経営者層の別荘化に始まる。1900年（明治33年）頃、朝日新聞社社長村山龍平が御影（神戸市東灘区）に土地を購入し、1905年（明治38年）には東洋紡の一族の阿部元太郎が住吉観音林（神戸市東灘区）へ移住し、その後住友・鐘紡・倉紡関係など財界の有力者たちが住むようになる。芦屋では、1907年（明治40年）に大阪府立高等医学校長で結核を専門とする佐多愛彦が阪神間第一の「健康地」として芦屋の山手地帯（松風山荘住宅地）に自ら別荘を建てた。

有名なのが、電鉄会社が安定した集客を求めて沿線開発の一環として行った宅地開発である。阪神電気鉄道は、1909年（明治42年）に阪神西宮、翌年鳴尾（西宮市）で貸家を経営し、その後御影山手、甲子園（西宮市）と宅地経営を進める。1910年（明治43年）から池田や箕面において沿線の土地の開発・販売を始めていた箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）も、1920年（大正9年）に阪急神戸線を開通させ、岡本（神戸市東灘区）、甲東園（西宮市）、稲野（伊丹市）、西宮北口など周辺地域の宅地化を進めていく。

さらに、地主を中心に行われた耕地整理事業によるものがある。芦屋では、1917年（大正6年）から耕地整理事業が行われ、山林原野地を中心に宅地に変換されていった。純農地は1919年（大正8年）から1930年（昭和5年）の間に年平均16.4町減少していき、宅地は1912年（大正元年）の40.9町から、1926

年（大正15年）には114.6町、1930年（昭和5年）には158.2町と増加する。

他に、夙川（西宮市）の開発にあたった大神中央土地株式会社など、民間の土地・住宅経営会社による宅地造成があった。

こうした様々なタイプの宅地開発に共通して掲げられているのが「健康」である。1908年（明治41年）に阪神電鉄が発行した『市外居住のすすめ』では、佐多愛彦を筆頭に医者が中心となって、死亡率や空気の汚染度合など数々の数字を挙げて、煤煙によって視界が開けない大阪と空気清澄な阪神間が対比される。都市は人が多いゆえに感染の危険が高く健康に悪い場所として確認され、空気の「善悪」に注意を払う必要が強調され、郊外生活が賞揚された。また、株式会社六麓荘は1929年（昭和4年）に「東洋一の健康地」六麓荘を開発する。阪神電鉄と大林組住宅部が開発した浜甲子園健康住宅地では「健康住宅」が設計コンペで募集され、1930年（昭和5年）浜甲子園健康住宅実物展覧会として展示され販売された。その近くの土地は、今津土地区画整理組合によって「西宮今津健康住宅地」と名付けられる。

こうして「都会の俗塵を避けて郊外の清爽なる生活を営む者、年を追って増加するに至り、名のみ芳はしくしてその実寂寥なりし須磨、芦屋、さては住吉六甲の地は、忽にして大厦高樓の櫛比するを見るに至れり」⁴⁾という状況が生じてゆく。芦屋を例にとると、現芦屋市にあたる精道村人口は、1889年（明治22年）には3,285人で、1909年（明治42年）には3,904人と微増したにすぎなかったが、1920年（大正9年）に11,151人、1924年（大正13年）には16,728人と激増し、1926年（昭和元年）では20,586人となる。こうした人口増加が社会移動によって生じていることは、出身地別統計でも確認できる。1930年（昭和5年）において、精道村人口28,404人のうち、村内出生者は21.5%（6,113人）にすぎず、精道村を除く兵庫県内の出生者は20.8%（5,905人）であり、残る57.7%（16,386人）が、他府県・外地出身者となっているのである。

1920年（大正9年）から1921年（大正10年）にかけての阪神電鉄の各区间別乗客数は、西宮—神戸219万7657人、西宮—大阪386万7619人と、阪神間東部が

らは大阪へ通勤する方が多い。1930年（昭和5年）における、大阪市への通勤・通学数は、岸和田・堺・吹田・豊中など大阪府内からが61%（42,193人）で、兵庫県からが32.7%（22,621人）である。兵庫県内では、西宮市（2,096人）と、精道村が属する武庫郡（8,738人）あわせて半数近くになっている。

こうした新しい居住者について、前出のような大企業経営者層、大阪に多い自営業の旧中間層、そして俸給生活者や官吏などの新中間層を想定することができる。当時の電鉄会社の宅地は、高価な洋館に対し、和風を基調にすることで低廉化がはかられ、いくつかの種類に分かれていた。電鉄会社は、「巨万の財宝を投じ、山を築き水を導き、大厦高楼を誇らんとする富豪の別荘なるものは暫くおき」⁵⁾、主に「部・課長クラスのサラリーマン」を対象にしていた。

1916年（大正5年）の阪神電鉄の通勤定期購入者の内訳は、労働者487人（10.6%）、銀行・会社員1,364人（29.7%）、商人1,192人（26.0%）、官公吏144人（3.1%）、農業51人（1.1%）、雑業658人（14.4%）、学生691人（15.1%）となっており、会社員・官公吏が約30%を占めている⁶⁾。このような新中間層は、当時全人口の5～8%とされるが、武庫郡では、1919年（大正8年）において、例えば公務及自由業者は、総計14万982人のうち1万21人で7.1%にあっている。

なお、1929年（昭和4年）の第3種所得税総額では、住吉、精道、御影の順で配当が多く、俸給が多いのは精道、西宮、御影、住吉であるという。精道では配当と俸給だけで60%近くになっている。田畑の減少や第1次・第2次産業従事者の少なさ、住宅の売買価格、医者などの専門職の多さからみても、この地域が中間層を中心に行っているということができらる⁷⁾。

こうして、阪神間に居住し、そこから大阪または神戸に通勤するという職住分離の形態が多く見られるようになる。それは、結核などの慢性伝染病予防にも有効であるといわれていた。女性の結核は「小は一家の生産より大は一国の富強を計る上において一大損害をきたすもの」⁸⁾とされ、郊外生活は女性を屋外に出し、身体を動かす機会が増え、健康をもたらす事として奨励されている。

が、そこでは女性の健康は、「外」での仕事を担う男性に対し「団欒」を用意し、子どもを健康に産み育て教育を施すために重要とされ、その点で国家の富強に繋がっているのである。女性がこうした役割を内面化し、衛生的で近代的な「家庭」を作りまた守ること、すなわち良妻賢母を生きることが、女性の国民化であった⁹⁾。

「健康」や「郊外」をめぐる文章を読んでいく中で気づくことは、不衛生で不健全な都市と健康で清潔な郊外の対置に加えて、神経を刺激する会社勤めと、安息の場としての家庭が対比されていることである。箕面有馬電気軌道の住宅案内『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋に住むべきか』は「郊外に居住し日々市内に出でて終日の勤務に脳漿を絞り、過労したる身をその家庭に慰安せんとせらるる諸君」と呼びかけ、阪神電鉄の『市外居住のすすめ』は「商業の頻繁なるがために精神を使うことが非常に多い大阪の如き所」では「最も一家の円満と健康とを欠いでは十分なる活動を永く続けていくことができぬ¹⁰⁾と語る。厳しい仕事の世界は、家庭の安らぎがあってこそ成立させることができる。つまり、仕事という「公的」とされる領域と家庭という「私的」とされる領域が異なる原理でもって分離されていることが確認できるのである。こうした「家庭」の姿は、既に明治20～30年代にかけて、言説として登場している。そこでは、性別役割分業による、愛情に満ちた、汚れない家庭の姿が理想として語られている¹¹⁾。大正期に生じた新しい階層、高い教育に裏づけられた新中間層がこの「家庭」を実現した。しかしそれは安定したものではない。進学率の高まりと度重なる恐慌によって、学歴と職階、そして給料とが密接につながりながら、それが確実には約束されない状況が生じてくる。その中で健康は「個人の生活・人生を作っていく能力の象徴」¹²⁾として、学歴とともに言わば「文化資本」的に存在し重要性を増す。都市は競争の場であり、健康を損なわせ、学歴を作り上げる意志を挫く誘惑の危険に満ちた場所として受けとめられる。こうした都市における身体的、道徳的な「汚染」の心配は、当然、大人だけでなく子どもにも向けられた。

1925年（大正14年）、大大阪博覧会では、「子どもの大阪」という部門が設けられ、「煤煙と塵埃と喧騒と危険とに悩まされている大都市殊に大阪の子ども界に、最も大きな福音であるべき『自然へ自然へ』の理想を具体化したもの」として「煙の都から郊外へ広がる子どもの国」というパノラマが展示されていた。自然あふれる「健康地」は、子どもの「理想地」ともされていたのである¹³⁾。

2 子どもへの配慮

大正期に入り、諸外国の乳児死亡率が年々下がっていく中で、日本の乳児死亡率の高さが問題となっていた。出生千当たり全国平均が1917年（大正6年）には173.2、翌年には188.6と、上昇傾向にあったからである。こうした状態についてまず原因とされたのが、「衛生思想の不徹底、生活法の不衛生」であり、育児法の改善が求められる。そのため、児童衛生展覧会などによって啓蒙することが国家的な課題となっていく。

乳児死亡率の問題は、大阪で特に深刻に受けとめられた。例えば、1917年（大正6年）において、254.4といったように全国で最も高かったからである。そこで、大阪では官民一体となって児童保護事業が積極的に行われ、子どもをめぐる活動が活発に行われていく。その中の1つに、日本児童協会がある。

日本児童協会は、1920年（大正9年）、大阪市北区に事務局をおいて設立された「児童保護に関する研究団体」である。治療教育学で大阪市児童課長の三田谷啓、児童心理学の高島平三郎、日本児童学会を主宰する富士川游など、14人の医学・文学博士を顧問とし、機関誌や単行本の発行、講演会や展覧会などの企画・開催、「児童愛護宣伝デー」などのイベントの開催、「キョーカイケーキ」といった子ども用お菓子の販売など幅広い活動を行っていた。会員は府下・阪神間を中心とするが、後に東京や津和野に支部が作られるなど、全国的な広がりを見せている。その機関誌『日本児童協会時報』は、1924年（大正13年）に『育児雑誌』と改名し、1929年（昭和4年）には『母と子』と改題された。この段階では、日本児童協会は母性教育の宣伝機関と位置づけられている。

家庭の改造、社会の改造、国家の改造も結局はコドモの改造から初めることが最も近道です。近来児童に関する問題が著しく重要視せられるようになったのは、この点よりみて実に喜ぶべき現象だと思えます。これと同時に、児童教育の方法も複雑となり、一方には学理の研究を要し、他方には実際上多大の注意を払わねばならぬことになりました。日本児童協会の生まれたのは、この理由によるのであります。

本協会はかくのごとくコドモの教育と、擁護に関し、理論と実際の方面に於て、どこまでも児童保護者の好伴侶たらんことを期しております。家庭と社会と国家に幾分でも貢献することが出来たら本会設立の目的が達せられたのです。幸にして斯道専門大家の指導と援助とを与えらるるあり、かくて江湖の期待に添うことが出来ると信じております¹⁴⁾。

と趣意では、子どもに関する関心の高まりと、子どもが研究され注意されなければならない存在となっていることを指摘している。明治後期から、箕面有馬電気軌道や三越百貨店などの主催で子ども博覧会が開かれたりしており、子どもを「大人とは違う存在」としてとらえるまなごしは既に存在していた。ここに来て、乳児死亡率を「国民文化」の基準としてそれを改善し、育児法の改良によって「人種改良」をめざすといった立場だけでなく、過去の習慣に縛られて改良が難しい大人に対して、合理的な生活を早くから身につけさせることで子どもの世代に期待する生活改善の立場など、新しく様々な方向から子どもに関する関心が高まっていたのである。1920年（大正9年）7月創刊号の「発刊の辞」は、子どもの教育を「親たるものの尊い清い務め」とし、それを担う親たちの「好伴侶」たらんとして『日本児童協会時報』（以下『時報』と略す）を発刊すると述べている。月刊のこの雑誌には、子供に関する理論と実践法、各地で行われた講演会の演説の再録や展覧会の展示の紹介、諸外国の動静、国内の講演会などの日程予定とその報告などが掲載されている。

『時報』では、結核やトラホーム、感冒や湿疹、虫歯、近視等の病気に対す

る知識と対処法、怪我などの応急手当の方法、さらに離乳後の食物、牛乳の取扱方、子どもの泣く理由など具体的な育児法について、専門家としての医者の立場から「科学的な知識」が伝授され、子どもの抵抗力を増進させる「積極的育児」が主張されている。栄養やビタミンなどの科学的な知識に裏づけられる形で、母乳は「完全栄養品」と位置づけられた。「ミルクで育てる子もあれど何より可いのは母の乳」（児童衛生展覧会においてその入場者と各府県に配布された「児童衛生教え歌」の一節）とされ、母乳で育てた子供の死亡率が低いことが確認される。こうして母乳を持つ者＝母の役割の重要性が、科学的な知識によって強調される。それは女性の属性の1つの面だけを取り上げ、限定する中での賞賛であった。こうした母性の強調、身体をめぐる新しいまなざしとその内面化によって祖父母などの排除が行われるプロセスについては既に多くの先行研究があるが¹⁵⁾、ここでもそれを確認することができる。

日本の家庭の多くは、未だ殆ど無自覚な在来の育児法で子供を育てている。それから教養のある若き母親も姑の因習のために困められている場合が多い。老人は間違った育児法のために多くの子供を死なしたことは忘れてしまって、素質が強健で生き残った者のみを例として、それを楯に自説を主張して止まないから、容易に時勢に適した育て方が出来ない訳である。それゆえにその誤った真実を具体的に示して、得心の行くように育児衛生の思想を徹底せしめることが私共の努めであると思う¹⁶⁾。

これは大阪市立乳児院長によるものであるが、このような医療関係者達の啓蒙によって、従来の経験知が否定され斥けられていく。1923年（大正12年）6月29日、芦屋の精道小学校講堂にて精道児童学会が開かれ、雨にも関わらず四百名余りの参加者があった。その講演「家庭に於ける子どもの観察法」では、子どもを観察することの意義や方法について、そして周囲の環境にも気をつけなければならないことが語られる。「例えば召使等に就いてその人が第一に正直

であるかどうか、第二に不潔な習慣をもっておらぬかどうか、教育の程度はどうであるかこういう事はよく注意しなければならぬのであります¹⁷⁾。こうして近代知を理解しない者が子どもから遠ざけられれば、育児の担当者は、衛生思想を身につけ、その身の安全が既に確認され、子どもの心身への影響に対し敏感な者に限定されてしまうことになる。しかも、この限定された育児の担当者である母親に要求されるのは「子供の身体や精神に異常が起こらぬか否かを常に注意して居ること」である。母親は「家庭医の務めをする覚悟」がなくてはならず、「病気の兆候を早く観察する素養」によって、処置を施した必要があれば医者を引き継ぐといった判断が必要とされる¹⁸⁾。こうして、家族の身体が「科学的」なまなざしで見つめ直され、家庭と医師の連携が図られていく。そこでは、もはや子どもを強健にするだけでは育児とは言えず、「感覚の指導、意志や感情の訓練」を施さねばならないとされる。例えば4時間毎の時間ぎめ授乳、時間割に基づく離乳など勧められた規則正しいやり方は、ドイツやアメリカの育児法の輸入であるが、それは身体に良いばかりか、規律を守る意志の強さを身につけさせるものだと説明されている。

「健康な子」は、衛生に関する知識をもち、それによって自身の身体に気を配り、病気や不潔さから身を守るようにふるまえる、つまり自己規律化した「きちんとした子」であるが、それと同時に「よくできる子」でもある。新中間層は、継がせるべき家産を持たないがゆえに教育熱心であったが、ここで語られるのも健康と学校の成績の相関関係なのである。一方で、「子どもの天性」が賞賛される。これは、子ども「本来の」姿に高い価値をおく童心主義であるといえる。

子供という者は少しの間もなにもせずじっとしていることができないのであります。そしてそれがこどもの天性であって（略）それが精神を慰め思考力や想像力を養い動作や技術に対する練習となって他日に於ける大成の素地を知らず知らずの間に作っているのであります¹⁹⁾。

しかし和室やお店や二階や物干で遊ぶと叱られ、往来では交通が頻繁で遊ぶことができない。大都会の子どもである程伸び伸びと自由に行動することはできないとされる。

大阪の生徒や壮丁は、一般に発育が悪くて体格が薄弱であるのであります。これは新鮮な空気や日光の室内射入の不十分やその他種々の原因によるということはもちろんであります、子供の間に家の中でもまた家の外でも自由自在に面白おかしく活動しなかったということがその主なる原因をなすものと私は深く信じているのであります。それゆえ今後大都会ことに我が大阪市の如き都市に建築せられる住宅には必ず子ども向けの室を設計せしむる法律を設けてもらいたい²⁰⁾。

この講演は、日本児童協会第1回家庭講演会として、大阪府立商品陳列所内の生活改善博覧会聚楽館百畳敷で、汎愛小学校の家政女学校生徒百数十名と児童保護者併せて三百名に対して行われたものである。この博覧会では子ども室の模型が実際に出品されていた。同様の理由から子ども部屋だけでなく、公園も重視され、また郊外旅行や「山林や海浜にいくこと」も奨励される。1921年(大正10年)8月10日から26日まで大阪市立児童相談所主催、文化協会後援で、5日ずつ3期に分けて芦屋の個人の別邸において、大阪市内の尋常小学校5学年の男児の100名を定員として夏期植民学校が開かれ、山野散策や海水浴などが行われている。高野山や京都糺の森でも夏期学校や「虚弱な児童」向けの林間学校が開かれている。それは健康増進と共に、自由に活動する子ども本来の要求を満たすために重要なこととされていた。当時問題となる「神経質」は、「周囲の物事に極めて敏感になり、速かに身体・精神の疲労を来すもの²¹⁾であるが、これは自由を妨げられない「伸び伸びした子」の理想の裏返しでもあり、その予防には林間学校、海浜学校などが勧められている²²⁾。

こうして育児は「健康に育てること」だけでなく、「賢く育てること」、「伸

び伸び育てること」の全てをめざすようになる。『教育家族の成立』は、当時「子どもの純真さを賛美する童心主義」と「教育、学歴をつけることで無知な状態から子どもを脱却させるという矛盾した心性」があったことを指摘している²³⁾。『日本人のしつけは衰退したか——「教育する家族」のゆくえ』では、そこからさらに、子どもをめぐるまなごしに「無垢＝無知であるがゆえにちゃんとした人格や生活規律を身につけさせようとする厳格主義」と学歴主義、童心主義の三者が交錯することを論じている²⁴⁾。そしてここでもこの相矛盾する3つの志向を見い出すことができる。

大阪市保育会は、「児童愛護宣伝デー」にあたって、「幼稚園時代の年齢の子どもに関し、コドモの保育を重要視する精神を喚起せしむる文、コドモの体育衛生に関し最も注意すべき諸事項を明らかにする文、コドモの知識を如何にすれば最も能く啓発することができるかを明らかにする文、コドモの躰をなす諸心得を明らかにする文」についての懸賞作文を広く募集した²⁵⁾。その入賞作は、『時報』1921年（大正10年）第2巻第12号に掲載されている。まず、選外佳作の、食事のマナーについての替え歌である『食事の規則』や『歯ブラシを使わず習慣を』といったように手や口を清潔にすることの大切さを説くものがある。二等当選の『子どもに勉強をおしつけるな』は、「身体がなにより一番大切」だとして、勉強に対しては「秩序が立っていれば、どんな方法でもよろしい。子供の好きな様に、自由に気儘にさしてやって下さい」とし、同じ二等の『知能啓発の方法』でも「何事も教え込もうとしてはいけない。知りたいという内心の要求をおこさせることに注意せねばならぬ」と押しつけてなく子どもに任せることがポイントだとしている。このように、子どもに任せることでその「本性」を伸ばそうとする態度は、入賞作品に共通して強調される点である。しかしそれは『知能啓発の方法』で語られているように、「危険であったり悪習を馴致するものでない限り」許される自由である。子どもに任せることが強調されつつ、実際には親による入念な方向付けが行われるのである。

子どもを自然の儘のびのびと健やかな発達を期するには、先ず親達は子どもの遊ぶが儘に遊ばし、為すが儘に任しておいて、常にその遊戯なり、仕事の結果に、深甚の注意を拂うことが肝心です。若し遊びや為ることが悪い結果をもたらすようであるならばその次のそうした遊戯なり、仕事に臨む機会を与えないように、他の用事を申し付けるか、又は子どもをして自然に他の良い遊びに心を転ずるように親達が機会を見出して与えてやるようにせなければなりません。この事を幾度も繰り返す裡には子どもの胸中に或ものを感じ自然に善事に親しみ悪事に遠慮するようになります。多くの親達は善良にして愛情ある子供の好伴侶として一進一退毎日を暮して欲しいものです。

と、一等当選の『躰方の要点』は、その観察と配慮の効果について述べる。選外佳作『子どもを育てる相談』では「子どもを悪く躰けたり、悪い行いをして近所の子どもに見せることは火元をしり悪い病の元をしたのと同じ様な罪である」と述べ、「両親はもとより一家の者が足並みそろえて子どもの躰をせねばなりません」と両親や祖父母で意見が食い違い、態度が変わることを良くないこととする。そして両親の仲、友人などの選択など周囲の環境を望ましいものに整えることも大事だとする。つまり、重要なのは綿密な親の教育的配慮なのであり、子どもは、親が注意して作り上げた環境の中で、望ましい在り方へ「自主的に」自己を形成するのが理想とされ、こうした子こそが「良い子」とされるのである。

健康な子は学力もあり、その知能は素直さを重視することで開花する。しかし実際には強く、賢く、伸び伸びしているといういわゆる「パーフェクト・チャイルド」を育成するのは難しい。しかもそれは親の振る舞いに掛かっている。

自由に、そして愉快地に、勉強と遊戯のできるように、仕向けていかなけ

ればなりません。親のふしだらな言行を見聞きさせることも慎まなければなりません。そして自らは親切なる指導者であり熱心なる教育者であり、信義ある朋友であるといった風の謙譲な心掛けでコドモに臨んでほしいと思います²⁶⁾。

「模倣性に富む」という子ども本来の性質を強調して、親が模範となるべきことが示される。こうして親は子どもに注意深く配慮するだけでなくその視線を自らにも向けなければならなくなる。それは、自身の中にリスペクタブルではないものがないか点検し矯正しようとするまなざしである。親もまた、パーフェクトであろうとして、そのための情報がこうした雑誌や育児書に求められる。だが、ここでも反転が見られる。『時報』第2巻第9号より、大阪市立児童相談所において実際に取り扱われたケースが紹介・連載されている。タイトルは、「親達が生徒を悪くした事例」²⁷⁾。親が兄弟によって接し方を変えたり、子供の前でうそをついたりすること、つまり不注意な親の振る舞いが子供に悪影響をおよぼすことが事例で注意される。「育児悲劇」という記事のシリーズもある。また、「不良少年」についての記事・講演も多い。「不良少年」を生む原因については、「幼時の健康不良」、「悪い」家庭環境、近くに活動写真があるとか悪い友人などといった「悪境遇」であるとされる。彼等は放縦で衝動的で、経済観念に乏しく、軽率で向上心に欠けているとされる。「悪いこととは知りつつ制御する能力がない」という特性によって、「不良少年」は「病人」と規定されている²⁸⁾。こうした、「不良少年」を「健康な者」と区別しようとする言説の登場は、モッセの言うように、「自制する能力の欠如」を基準にして境界線を引こうとする動きだということもできる。こうして子どもをめぐって、リスペクタブルでない状態が新たな方向で「問題」として発見＝創出されることになるのである。

多少これに似寄った兆候はどんな子どもでももっているが、それが適当

に制裁が加えられ、感化され、教育されない場合に、所謂不良少年となるのである。それで全体からいえば、国家の為め、民族将来の為め、直接間接には我が子の為め、不良少年とならないようにこの原因を究めてこれが排除に努め、凡ての児童をして健全なる発達を為さしめ、善良なる国民を為すべく指導啓発の任務を果たすは吾々が当然責任を分かつべき問題であると信ずるのであります²⁹⁾。

親がきちんとしていなければ育児に「失敗」してしまい、受験に落ちたり、「不良少年」になったりする「危険」が生じる。それは「とりかえしのつかないこと」とされてしまっている。一方「秀才」や「優良児」も「心身の発達の調和を欠いたもの」で、優良のまま育つとは限らず、その「導き方」にも気をつけなければならないとされている³⁰⁾。こうして「標準」が問題となる。子どもをめぐる近代知において、子どもの身体だけでなく頭脳や精神もまた計量可能なものになっている。子供が今どういう状態にいるのか、標準に達しているかが調べられる。理想体重・身長が公式化され、身体的・精神的な発育標準が規定され、検査が行われる。「標準」は、医学の進展と不安を抱える親の要請の中で形成され浸透した。「赤坊審査会」もこうした流れの中にある。東京では以前から行われていたが、大阪では1922年（大正11年）、大阪市民館赤坊展覧会で初めて「赤坊審査会」が開催される。市内及び府下からの884名の応募者の内、身体・栄養面の審査により95名が当選するが、その大部分が母乳で育った者で、母乳以外で育った者は4名であったという³¹⁾。その後芦屋でも「あかんぼ審査会」が歴代村長を会長に、警察署長を顧問として開催される。

親と離れて暮らす場合も少なくない状況で、従来の育児法を否定され、仕事と家庭という領域の分離が進む中で、育児は母に限定された行為となっている。「子守」や近隣とのつながり、祖父母や父の排除が進む中で母の孤立した育児は「失敗」への不安に満ちている。「標準」と照らし合わせることで安心することもできるが、それは選別の契機ともなり、さらなる不安の原因にも

なってしまう。子どもに注意深く配慮するまなざしこそが、不安を生んでいく。そして不安だからこそさらなる配慮が進んでいく。それは子どもを「幸せに」育てたいという、ある意味では当然の要求に合致していた。教育的なまなざしと母親の不安が広まり、個別の育児相談もまた様々に行われるようになる³²⁾。それは啓蒙の使命を抱える専門家と、不安を抱えた母親たちの要請の双方から生じた動きだといえる。こうした中、『時報』は『育児雑誌』と改題した。

3 リスペクタブルな場所、リスペクタビリティの「影」

「健康」は単に「病気ではない状態」ではなく、衛生に気を配り、環境を整え、自身の身体に配慮する事で作り上げるものである。この身体技法の浸透に伴い、都市は危険な場所とされ、清潔で健全な郊外が求められていく。郊外は安息の場としての家庭と結びつき、その結果距離としても構成原理としても公私の分離が進んだ。そのなかで、家庭は母と子どもの領域とされ、そこでは規律訓練を施す教育的なまなざしが貫徹する。「強く賢く伸び伸びした子ども」つまりパーフェクト・チャイルドがめざされ、親もまた自らを点検し、育児不安が増大した。親の不注意な振る舞いによって子育ては「失敗」し、「不良少年」や受験に失敗する子どもが出てくるという図式が描かれる。たとえ最初は優秀でも育て方によっては長続きしないという注意もある。子どもは標準によって計測され、「選別」されていく。

大正期半ばから、中学校・高等女学校の志願者数が急増する。阪神間でもこの傾向は強く、特に精道尋常高等小学校は阪神間でも有数の進学校であり、県外からの越境入学者が見られるほどであったという³³⁾。一方で、既成の教育に対し、子どもの自主性を尊重する自由教育も試みられる。「芦屋児童の村小学校」である。が、この教育は挫折し、1938年（昭和13年）に学校は三田谷治療教育院内に移転し「翠丘小学校」となる。これは、三田谷啓が創立した治療教育院に附設された学校である。1927年（昭和2年）に創立された三田谷治療教育院の当初の活動は、「障害児」だけでなく、「身体虚弱、成績不良、不従順、

神経質」などの子どもも対象にした「近代的な制度にうまく適応できず、はみ出てしまった子どもをその制度のなかへできるだけスムーズにおくりかえす試み」³⁴⁾でもあったという。

また大阪では、その「不健康性」を浄化しようとする動きが益々盛んになっていく。1932年（昭和7年）には大阪遠足連盟が結成される。それは「稠密なる人口と煤煙と騒音との裡に（略）交通地獄と世知辛い生存競争に脅かされつつ、神経衰弱的」で「焦燥した気分で生活に喘いでいる」都会人にとって「努めて郊外に出で、麗かなる陽光を浴び、清新なる空気を満喫し、山野を跋涉して身体を鍛えると共に（略）純潔高尚なる趣味に精神の慰安を求むる事」³⁵⁾を勧める活動であった。やがてさらに展開して、健康増進、健全娯楽の推進をめざす厚生運動が盛り上がる。阪神間では既に家庭を対象にした娯楽が展開していた。それは家族全員で楽しめる、健全なレジャーの場でもあった。だが、レジャーが、望ましい身体を形成するための運動として「真に郷土を知り祖国を経験する」³⁶⁾ための体験として位置付けられる時、ここは「新しい場所」であるがゆえに重視されない。

阪神間は、リスペクタブルな場所である。六甲山系の麓、海も近く、空気が明るく澄んだ自然のもと、「安らぎにみちた」家々が作り出す空間は、時に穏やかで、いつも清潔で美しい。それはリスペクタビリティの持つ「光」の側面でもある。この地でその人格を尊重され、理想的に育ち、才能を伸ばした人々は決して少なくはない。「阪神間モダニズム」はこうした、教養の高い自律的で个性的な人々が作り上げたものだといえる。小林一三が作り上げた宝塚歌劇団のモットー、「清く正しく美しく」は不潔さや不健全さ、だらしなさの対極にある。考えてみれば、この地がめざしたものとして、これほどふさわしい言葉もないように思う。しかし、リスペクタブルであることを追求する思いは「すばらしさ」だけに満ちてはいない。清潔で健全な家庭をめざし、パーフェクトな母となり、そしてパーフェクトな子を育てようとする、リスペクタブルであろうとする人々が、絶えまない自己点検のまなざしによる永遠の不安の循

環に陥る、この動きはリスペクタブルであろうとする思いがもたらす「苦しみ」³⁷⁾の1つなのである。これはリスペクタビリティに内在する「影」の1つなのだといえる。

注

- 1) 谷崎潤一郎『細雪』（谷崎潤一郎全集第15巻）中央公論社 1968年、76～77頁
- 2) ジョージ・L・モッセ（佐藤卓己・佐藤八寿子訳）『ナショナリズムとセクシャリティ』柏書房 1996年
- 3) 『芦屋市史』1956年、2頁
- 4) 『武庫郡誌』1921年、61頁
- 5) 『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋に住むべきか』
阪神急行電鉄『阪神急行電鉄25年史』1932年、2頁
- 6) 阪神電鉄株式会社『阪神電気鉄道80年史』1985年、139頁
- 7) 1930年（昭和5年）において精道村の第1次産業従事者は6%、第2次産業従事者は20%となっている。また、1921年（大正10年）頃には、医師6名、産婆2名、鍼灸師3名を数えるのみであったが、1931年（昭和6年）頃では、医師52名、歯科医15名、薬剤師37名、産婆22名、看護婦70名、鍼灸師11名、按摩20名、私立病院4と増加している。
- 8) 坪井速水「愉快にして衛生的なる住居」高田兼吉編集発行『市外居住のすすめ』1908年、66頁
- 9) 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房 1999年
- 10) 大西鍛「如何にしたならば愉快に世を送れるか」前掲『市外居住のすすめ』95～96頁
- 11) 牟田和恵『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』新曜社 1996年
- 12) 黒田勇「ラジオ体操と健康キャンペーン」津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版 1996年、100頁
- 13) 大阪毎日新聞社『大大阪記念博覧会誌』1925年、248～253頁
- 14) 『日本児童協会時報』第1巻第1号 1920年7月（復刻版 大空社 1986年）
- 15) 成田龍一「衛生環境の変化のなかの女性と女性観」女性史総合研究会編、『日本女性生活史4 近代』東大出版会 1990年、沢山美果子「近代日本における『母性』の強調とその意味」人間文化研究会編『女性と文化 社会・母性・歴史』白馬出版 1979年

- 16) 三野裕「育児衛生思想を徹底せしめたい」『時報』第2巻第11号 1921年、18頁
- 17) 三田谷啓「家庭に於ける子供の観察法」『時報』第4巻第12号 1923年、4頁
- 18) 三田谷啓「児童教養雑話4」『時報』第2巻第8号 1921年、8頁
- 19) 長浜宗信「生活改造と都市に於ける子どもの保護に就て(下)」『時報』第1巻第2号 1920年、10頁
- 20) 同、11頁
- 21) 京都市児童院相談部「躰け方パンフレット2 神経質児童の教育—養へ、ひろい心を明るく周囲で!!」1935年改版
- 22) 和田豊種「児童の神経質(下)」『時報』第1巻第4号 1920年、7頁
1920年(大正9年)7月3日甲陽児童学会例会、武庫郡住吉甲南小学校講堂において開催、三百余名の参加
- 23) 沢山美果子「教育家族の成立」『教育—誕生と終焉』藤原書店 1990年
- 24) 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ』講談社 1999年、57~70頁
- 25) 『時報』第2巻第10号 1921年、29頁
- 26) 和田秀一「世界の改造はまずコドモから」『時報』第1巻第6号 1920年、19頁
- 27) 稲葉幹一「親達が子供を悪くした実例」第2巻第9号より連載
- 28) 武田慎治郎「不良少年は病人である」『時報』第1巻第3号 1920年、18頁
- 29) 高島平三郎「心理学上よりみたる不良少年」『時報』第1巻第5号 1920年、8~15頁 1920年(大正9年)10月14日、大阪児童学会講演会、大阪市東区今橋3丁目幼稚園にて開催、聴衆三百余名
- 30) 佐々木吉三郎「子どもを天狗にして失敗」『時報』第4巻第3号 1923年、20頁
- 31) 大阪社会福祉協議会『大阪府社会事業史』1958年、376~377頁
- 32) 大阪では1919年(大正8年)に市立としては全国で始めて児童相談所が作られていた。その相談数は1921年(大正10年)合計7,575件で一日平均22名である。その他出張相談75回、講師派遣60回、同所主催し19回参集者4,800名、宣伝活動8回となっている。1922年(大正11年)に愛国婦人会大阪支部児童相談所、大阪母親相談所、大阪市民館児童相談所が開設され、市立児童相談所出張相談部が増設され、翌年には三越内に大阪子ども研究会児童相談所が開設される。市立児童相談所の所長でもあった三田谷啓は、この年阪神児童相談所を芦屋精道村役場内に開き、大阪出張所も設け、翌年には中山児童教養相談所でも相談に従事する。だが、財政難から1924年(大正13年)、市立児童相談所は閉鎖された。阪神児童相談所は1927年(昭和2年)に三田谷治療教育院に移転する。
- 33) 加藤端穂「『美』を求めた教育」『阪神間モダニズム』展実行委員会編『阪神間モダニズム』

「リスペクタブル」な場所——清く正しく美しく

ニズム』淡交社 1997年、145頁

- 34) 加藤端穂「近代精神の結実」前掲『阪神間モタニズム』、149～152頁
- 35) 「都塵を脱せよ 大阪遠足連盟生る」『大大阪』第8巻第6号 1932年、160～161頁
- 36) 同
- 37) 奥村隆「リスペクタビリティの病」『他者という技法』日本評論社 1998年

Summary

A Respectable Place

-Kiyoku Tadashiku Utsukushiku (Keep clean, correct and beautiful)

Miki Mori

Health means not only being in a good condition but also keeping sanitation and maintaining a healthy body in a good environment. With such technical considerations of body in mind, people in Japan used to regard urban areas as endangering places and people who lived there sought to live in the suburbs. As a result, the suburbs were regarded as domestic areas.

Because of this, people made up a myth that the domestic areas were just for mothers and children. It promoted the mothers' interest in higher education for children. Most of the mothers tried to make their children healthy, smart and innocent, that is, "perfect" so that the mothers worried about child care very much. People believed that the mothers' unfavorable behaviors affected the growth of the children and that the children's success hinged on the mothers' support.

Children were estimated in the standard based on such a myth and this produced the issue of exclusion. Seeking respectable things (just like "perfect children") means distinguishing respectable things from non-respectable ones. As a general rule, people hope to bring up children in a good environment but it brings about uneasiness and exclusion. In such a cultural movement, the area between Osaka and Hyogo was made up into a "respectable place."